

令和 6 年度 北部高齢者見守り相談窓口設置事業実施計画書

実態把握訪問

対象者宅へアウトリーチを行うことで、認知症の方・独居高齢者等の困りごとを含めた生活課題を見出し、適切な支援へつなげることを目指す。また、プレフレイル状態の高齢者をターゲットに、見守り登録者人数の増加を目指し、フレイル予防の啓発活動を行う。

【目標】	評価指標値	実績
アウトリーチにより地域高齢者の生活実態の把握をおこなうとともに、困りごとに対して適切な支援に繋げる。	1,200 世帯 ※訪問不要者含	1,314 世帯 上半期:669 世帯 下半期:645 世帯 ※訪問不要者含 ※3 月 10 日ㄨ
【実施方法】 関戸 1～5 丁目、一ノ宮、愛宕 1 丁目、愛宕 2 丁目、愛宕 4 丁目(和田 3-1、東寺方 3 移転先の新都営住宅のみ)を訪問する。困りごとの有無の他に、通いの場への参加状況や緊急連絡先を聞き取ることで、孤立しがちな高齢者を把握し適切な見守りがおこなわれるよう働きかけをおこなう。		新都営住宅 65 歳 ～74 歳 40 世帯
【上半期振り返り】 関戸 1～5 丁目、一ノ宮 1 丁目地区 669 世帯の訪問をおこなった。職員の欠員期間があったが、包括職員と訪問することにより 2 名体制は継続することができた。新たに建設されたブリリアタワー(関戸 1)では、他の地域から移転されてきた高齢者に対し、窓口や地域資源の紹介を強化しておこなった。訪問シートの使用が任意となったため、独自のシートを作成。訪問シート記入者と聞き取り者を分担することで、効率よく訪問内容の記録ができるようになった。緊急連絡先登録の新規登録件数は、80 名であった。		
【下半期振り返り】 一ノ宮 2～4 丁目、愛宕 4 丁目(新都営のみ)、愛宕 1～2 丁目地区 645 世帯の訪問をおこなった。通常の対象者に加え都営住宅の移転先である愛宕 4 丁目の 65～74 歳の 40 世帯を訪問することで、地域課題や担い手になる人材を把握することができた。 実態把握訪問の通知書に緊急連絡先の案内を同封することで、訪問時に受け取りが可能となり効率よく申請書の受理が可能となった。緊急連絡先登録の新規登録件数は、117 名であった。		
【年間振り返り】 一部地域で対象外の方を訪問したことで時間が限られてしまう部分があったが、訪問シートの記録方法や緊急連絡先の提出方法など工夫することで訪問の効率を上げ、目標世帯数を達成することができた。 年明けから北部エリア全体の訪問が 3 巡目に入り、不信感なく対応して下さる方が多くなっている。「以前に何回か来てもらったことがある者だけど…」と、訪問から時間が経ってから困りごとを相談して下さる方が増えており、相談窓口として地域に認知されはじめている。訪問で得られたデータの分析ができていないため、今後の課題と		

する。

見守りネットワークの構築

対象者を地域で見守る・支えるためには、地域の様々な場面での見守りネットワークの構築が重要となっている。その核として、見守り相談窓口・地域包括支援センターが機能を果たせるよう、ネットワークの仕組みづくりや関係性の構築を図っていく。

【目標】	評価指標値	実績
地域住民に対し、様々な場面で啓発を行い、高齢者の見守りに対する意識を高める。	協力員の登録 6 名	協力員の登録 5 名 (内 1 名登録予定)
【実施方法】 地域住民に対して、見守りサポーター養成講座、見守り協力員研修を開催し、住民主体の見守りの必要性について理解を促すとともに、担い手の育成をおこなう。 講座や研修の内容が理解しやすいものとなるよう工夫する。		
【上半期振り返り】 協力員の登録は 2 名であった。共に前期高齢者に対する市からの通知をみて登録に至っているため、今後は他の方法でのアプローチも検討していきたい。協力員活動が進む中で、協力員同士で考えの違いが生じていること、そもそもの活動機会が少ないといった課題が見えてきている。協力員活動の明確化や活動機会を増やす等、課題解決に向けて取り組んでいく。		
【下半期振り返り】 協力員の登録は 3 名であった。実態把握訪問での声掛けに取り組み、1 名は実態把握訪問をきっかけに登録に至っている。見守り登録者とのマッチングを進め、下半期は 3 組成立している。 また、協力員活動が少ないといった課題を解決するため、包括の主催する会議(わがまちミーティング)への参加や地域のコミュニティスペースの手伝いに声掛けし、活動へのモチベーションを保てるよう工夫した。		
【年間振り返り】 協力員の登録は 5 名と目標は未達成となった。しかし、協力員の中には、見守り登録者への訪問が自分自身の元気に繋がった方、自分の想いを形にして近トレを立ち上げた方、協力員同士の関わりの中で地域との繋がりができた方など、活動を通じて自身の生活を豊かにすることができており、協力員活動のメリットを改めて確認できた。 今後も、協力員一人ひとり得意を活かした活躍ができるよう支援していく。		

【目標】	評価指標値	実績
見守りネットワークを活用し孤立しがちな高齢者に定期的な見守り活動がおこなわれることで、介護予防や状況変化の早期発見・早期対応に繋げる。	見守り登録者	見守り登録者

【実施方法】 実態把握訪問時の聞き取りや、地域包括支援センター、地域の関係機関との連携の中で、日常生活に不安がある高齢者を見出し、見守り登録を促す。	6 名	14 人
【上半期振り返り】 新規見守り登録者は 11 名で、累計 23 名である。包括からの依頼で登録が約半数を占めており、介護保険の支援は必要ないが、見守りが必要な方とのアセスメントで登録に至るケースが多い。協力員とのマッチングは 7 組成立しているが、職員での対応がまだ多い。今後、協力員とのマッチング数を増やしていけるよう見守り登録者や協力員の条件の明確化を検討していく。		
【下半期振り返り】 新規見守り登録者は 3 名であった。シルバーピアや他市への引越しや、通いの場に繋がって終了となった方がおり、累計は 22 名となっている。基本的には協力員による対応であることを登録時に説明することで、マッチングがスムーズにおこなえるようになった。新規マッチング数は 3 組であった。		
【年間振り返り】 目標数を大きく上回った。協力員とのマッチングをすすめることで、協力員が対応することのメリットが明確となり、支援の幅が広がった。 単に見守りを提供するだけでなく、どうなったら見守り登録が終了できるのか(孤立しなくなるのか)を、職員はもちろん登録者自身が意識できるよう、先を見据えた支援の方法を検討していく。		

【目標】 地域の見守り関係機関と情報共有の機会を設け密に連携をとることで、実情把握や見守りネットワークの深化を図る。	評価指標値 会議の実施 5 回	実績 会議の実施 12 回
【実施方法】 中部高齢者見守り相談窓口、民生委員等と情報共有の機会を設け、互いの活動の進捗や方法、課題や役割を確認し、効果的な見守り活動がおこなわれるよう協同して検討していく。		
【上半期振り返り】 市と中部高齢者見守り相談窓口との話し合いの場を設け、各窓口でばらばらだったデータ管理の統一化や手順書の改訂を進めている(上半期 3 回)。民生委員の地区連絡会に参加し、地域の見守りについてケースの共有や地域での課題や気になることについて話し合いをおこなっている(上半期 1 回)。民生委員との連携について、個別のケースを話す機会がなく、詳細な情報のやり取りができていないことが引き続きの課題である。		
【下半期振り返り】 市と中部見守り相談窓口との話し合いを続け、事業内容の改訂に取り組んだ。定期的に話し合いをおこなうことで、疑問や課題を共有することができ、解決に向けて話し合うことができた(下半期 6 回)。民生委員との地区連		

<p>絡会に参加し、地域情報や課題の共有を通じて連携体制を維持できるよう努めている。（下半期 2 回）</p>
<p>【年間振り返り】</p> <p>市と中部見守り相談窓口との話し合いを密におこなうことで、あいまいだった事業の目的や内容が明確となり、業務がしやすくなった。手順書の改訂は終了したが、今後も定期的な話し合いを続けていきたい。民生委員との連携に関して、個別ケースの情報共有ができていないことが引き続きの課題である。</p>

<p>【目標】</p> <p>東寺方 3、和田 3(一部)の都営住宅移転にともない、新地での自治会組織を把握すると共に、ネットワーク構築及び活動支援をおこなう。</p>	<p>評価指標値</p> <p>会議の実施 2 回</p>	<p>実績</p> <p>会議の実施 2 回</p>
<p>【実施方法】</p> <p>地域包括支援センター(第 2 層コーディネーター)と連携し、既存の自治会等に働きかけ、移転先自治会の組織や活動内容を把握し、必要に応じて活動支援をおこなう。</p> <p>また、自治会に協力してもらいながら地域住民との話し合いの場を設け、ニーズの聞き取りをおこない、今後の支援に活かす。</p>		
<p>【上半期振り返り】</p> <p>既存の自治会長に連絡をとり状況を確認している。新地での会長は変わらないとのことだが、その他の情報は“未定”“ばたばたしていて落ち着かない”との回答で、話し合いの場を提案する段階ではないと判断。落ち着いた頃(11 月中旬)に改めて連絡すると伝え、了承を得ている。</p>		
<p>【下半期振り返り】</p> <p>引越し後の自治会組織、課題や取り組んでいることなど、自治会役員との話し合いの場を設け聞きとりをおこなった。第 2 層生活支援コーディネーターと連携し、体操教室の立ち上げを希望している介護予防リーダーへ繋ぎ、介護予防教室の立ち上げが成立している。</p>		
<p>【年間振り返り】</p> <p>自治会組織の変更がなかったためアプローチしやすく、関係性も継続できている。</p> <p>自治会との話し合いや、実態把握訪問で地域を回ることによって多くの住民からの聞き取りができた。引越し後、住民同士の関わりがないことに不安を感じている方が多いことがわかり、自治会や包括支援センターと連携し解決に向けたイベントの開催を企画検討中である。</p>		

地域活動

見守りサポーター、見守り協力員等による住民主体の活動を第 2 層コーディネーターと連携しながら推進をしていく。

【目標】	評価指標値	実績
------	-------	----

地域の中で活動している通いの場に出向き、活動状況を把握する。世話人や関係機関と有事の際に連携がとれるよう関係性を構築する。	随時	11 箇所/25 回
【実施方法】 地域高齢者の通いの場等へ出向き、活動状況・世話人・参加者の状況等を確認する。参加者の異変に気が付いた際や困りごとができた際に連絡をもらえるよう窓口の啓発をおこなう。		
【上半期振り返り】 介護予防教室、近トレ、サロン等の通いの場に出向き、活動状況を確認すると共に、窓口の啓発をおこなった。協力員と通いの場の少ない地域を検討し、第 2 層コーディネーターと連携してヒルサイドテラス(豊ヶ丘 1)にて近トレの立ち上げ支援をおこなった。		
【下半期振り返り】 上半期に続き、積極的に通いの場に出向くことができた。活動状況を把握することで案内がしやすくなり、地域との繋がりのない高齢者 6 名を通いの場に繋ぐことができた。また、その後も世話人と情報共有し、継続的に通うことができるよう支援している。		
【年間振り返り】 地域に出向く機会を増やし、活動状況を把握するとともに、窓口を知ってもらう活動を積極的におこなった。新規の方を通いの場にお連れし、その後の参加状況など共有することで世話人との関係性が深まった。 通いの場の少ない地域を危惧した協力員が、近トレの立ち上げをおこなったことは大きな成果となった。 今後は、老人会や自主グループなどまだ把握できていない通いの場にも積極的にアプローチしていく。		